

繪本龜山話

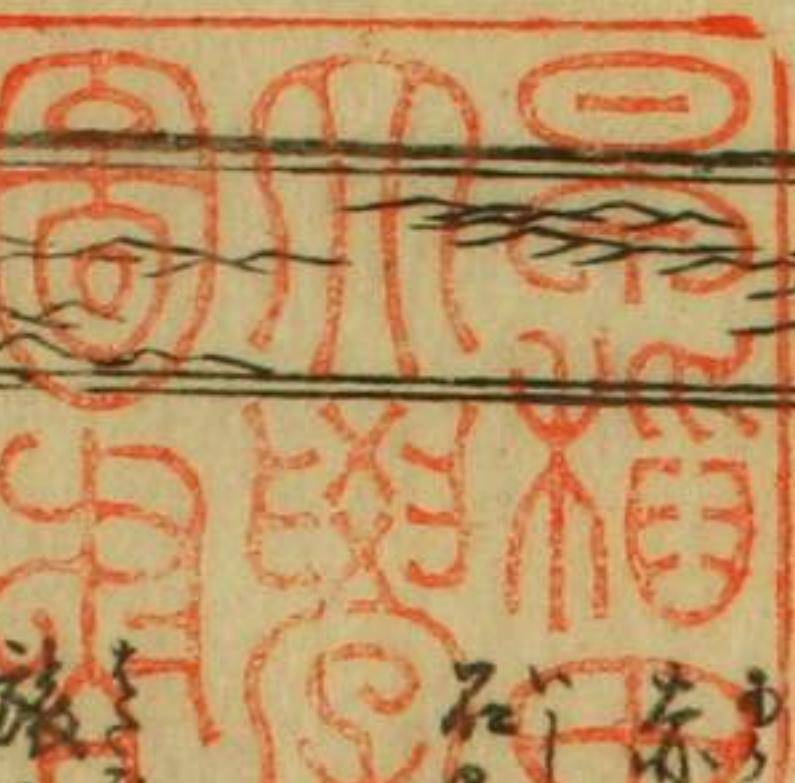
五



明
還

號
9172

卷
5



繪本巻之八

圖錄

赤塙侍入右房の傳中耳漏と詰

石舟兵助候中に了承詰

赤塙石舟をえく坐姿の圖

旅店の婦女赤塙の行房をうる詰

丹國

赤塙侍入右房の傳中耳漏と詰

丹國

其二

其三

赤塙侍入石居つ岩倉年かくわく詔
石多兵助大津年くゑく保七にまへ詔

日圖

月孫経

繪本巻之五

赤塙侍入石居
納中生源く詔

自者く縁くざれど禍更生も思ふくよひ赤塙侍入石居つと
一朝の怒りんとくば昇兵をうとけく甚だ尼が傳すく遅延さ
やううの方とれくお日とれくそひ近してるまゝ櫛列赤尾のが士
佐田伴右衛門と松く士官せんと旅商人の侍み生主笠く被
て厄う傷と三生目火通く赤尾母君と城下み宿かうてちゆ
細く恐れぬとぬのとくら紙とみと佐田がかり入ひそく走せられ其
頃体を走つて篠谷を走りあら合ひて寳山と上山と下山とも
やううべ又赤尾とも三生く肥別求麻年一とあらうて抱うて袖
中袖ひまでもううく宝山福徳の旅を也居年十兵衛とて書のう

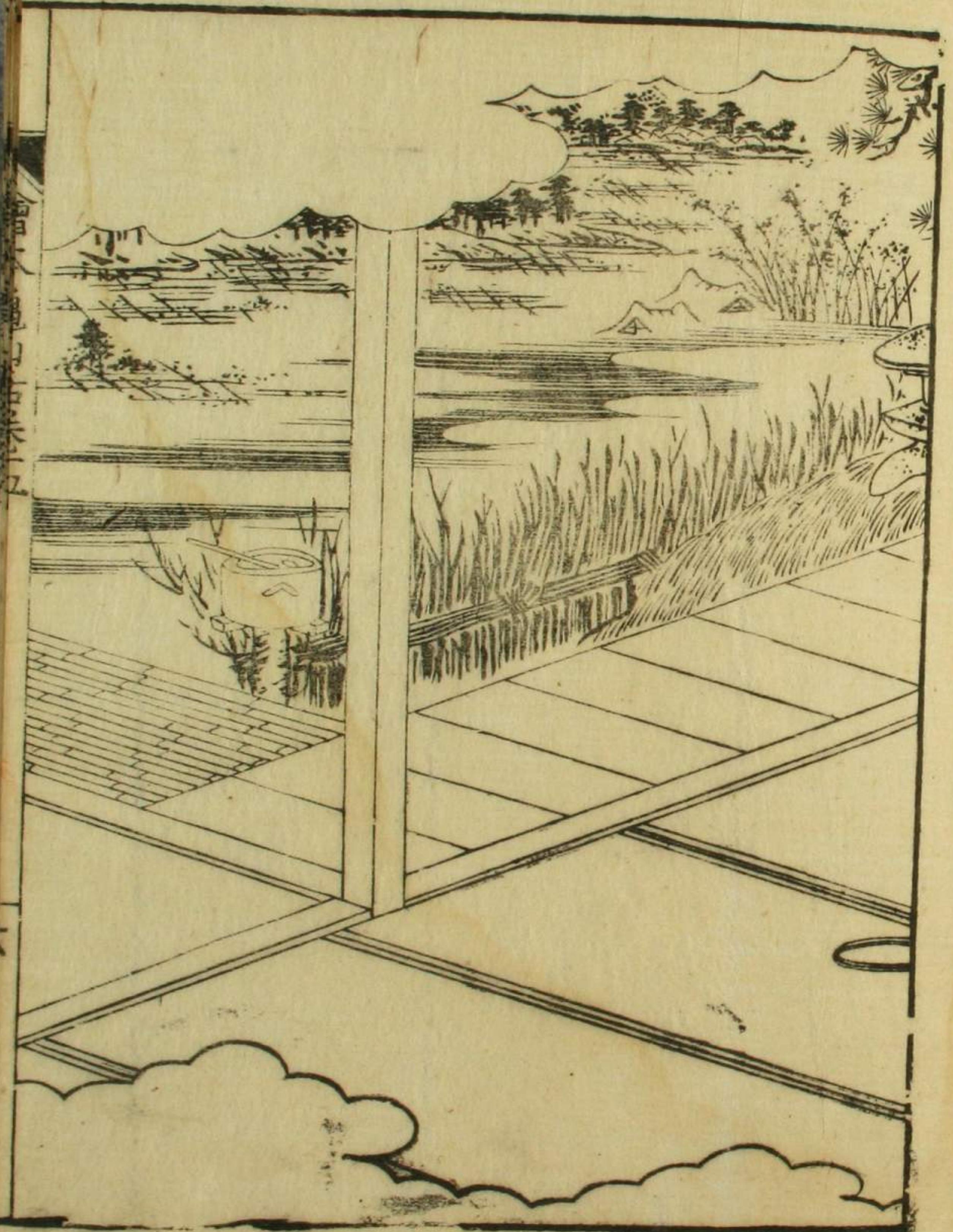


文宗、亟往同國。松山外居。行。時起。くまくらに。是年十一月。
連軍の更あうて。もとぞれ。行所とも。追拂。さざへ。はる。余其氏の縣。
顧。見。かづか。十兵。清。罪。ふたた。肉。縫。ト。まう。紀めの上。
ひ。小連軍。と。を。さ。り。十兵。清。し。想。代。ふく。感。お。雨。が。上方。へ。登。る。一。
後。毛。毒。子。毛。清。成。通。じ。て。意。想。代。ふく。感。お。雨。が。上方。へ。登。る。一。
そ。で。出。へ。西。國。へ。そ。る。一。ひ。お。れ。清。貴。の。貯。ま。す。一。金。だ。章。う。る。一。と。ま。
底。が。方。一。ま。う。一。切。改。革。の。時。情。成。本。寒。年。新。か。く。な。細。わ。く。人。と。
深。絶。く。べ。と。離。え。ま。一。伴。し。今。の。憚。不。久。く。石。料。と。射。く。西。國。下。ま。
次。第。ま。し。一。徳。う。清。貴。の。助。力。と。も。う。に。十。兵。清。と。代。す。く。人。に。
警。ひ。貴。不。久。坂。山。が。空。と。の。そ。う。ひ。あ。り。一。空。す。す。う。り。
ま。く。草。木。と。の。そ。う。う。の。熱。あ。り。と。外。傷。及。び。と。矣。

て迎噴を慚う。次第とぞくく販はのてまつりも益々
じよふゆくと馬車を終て史文の歎とぞくらむとぞくせ
肝垂うり然るに貴不人役とぞ延き後石井のみ息づくに坐
西林らべてわたりたたひも國へすうすくも容易に士官
も成るゝとてもくく我方みけんあつて年が暮れると細ひ
きし後行おほりまおほく安あづべて某町へよりどりやうと
余ふくく圍いびてからかさくもきを有ぐだとある
併え右馬えをうちとせぬ一疋いつばを反そなげ十兵じゅうへい湯ゆが重じゅう情じょうみ仰あおせば
心こころを止とどめとひびく金かなく年月ときとぞ送おもう
石井兵助いしゐひょうすけ中なかみづれ語
却よ後ごも石井兵助いしゐひょうすけ播はん列れつもく人星ひとほしが信義しんぎののしおとく中なか幽ゆう九く列れつ

石井其助傳中身の如き語
井之助ハ播州より人星が佐

の後赤手すすりを下城下へつて及び至る里村みどりまである
まことに被く求め年と詔とどもさうく赤酒が行房を望まれ
べ一先と方へようすは深七がま動ともまく上東國伏る口べしも
肥後と出で道の駅へんかと有り會の先ゆゑとて、も赤酒が
を家とあづと役もありんとまを取ゆとて、日が原と納中御碑み
ゑぐりし。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
の辻を小弓と一也(ひもんと駆と)と小富ととらう醫とま行くと孫
はとがく内山代をゆけりもあらんと一日醫師と口方ふの際及
けるに醫師やとし医の医處が方ふと年うり一人の害あつ子田あつ
とく者と人ふ接はば一間みゆくとあらとまくとあらと被ふて被
用奉れと謂ふとあらと仰おさんとよくわざと兵助耳



次第方から引ひて兵助と一回入て休息へたがハシナシあつたので
旅人と思はんと一不とも薦せば用ひの津をもじりて勝手の方
と疏懶でしたる角のゆきわざと所くにち集うて聞く津ひ、
便身も共くそくを授へようやくに因ゆまがわやゝとおもて因へば
おゆまくとまく文とおとことて因と曰ふく包とてゆくが
よく不審と云は被隠と旅宿のぬまうたらゆりやあんぬかと
ゆき室をひき換ふとうひよろびとまくおまと止みけり
旅店の婦女赤塙の紗房と名づけ
鄭清婦女の娘と別ぐらむとてに漁翁と戒ひゆめにあはび又人破い
中れどもくそ理のまと見ゆべとあゆもあんう室にけ家か十八九
家うち女あうる岩色美艶やさくとももわざと鄙へて之の婢

旅店の婦女赤面の紅茶とおもろ話

伴と夕ゆか多事と云ひてあがめにせよと云ふと曰く
今おどき聲とへまう不縁あんまのは切付小種とやるをのやど
感するみわまうわく我じ森みまくしはと子細むきとつまごとの
後うとせん先みりが送るあく其方滅み多とつらう助くをゆき
ざまれどもとゆき多とゆき助くをゆき
ぬるひの色と色とみのやまとやまと花威をとけしき
やまと花威とやまと花威とくひあう只今もやまと花
ゆみふひくふかくばらちくやもあ里ふとせきくはくと
葉をくじくひきくとくひきくとくひきくとくひきくと
おもひくみもひくとくひきくとくひきくとくひきくと
西振ふとくひきくとくひきくとくひきくとくひきく



古今圖書集成

卷五

九



古今圖書集成

卷三

九

赤坂と中子
婦女と
林と圖

家來小令じくひとてのむの圓へどまくもれつて及ばず婢女ト
僕坐るまく色を多く色を多くゆび其也（母）まみの翁（翁）
ゆのあら人の色と風とをまとせんと通頬差理ある事（事）と云
卒被名せ姓名（名）をうかくすら圓（圓）でよと家儀をくづ（拂）る女す
きくいねあざまひに小頬（頬）ありあづけ縫（縫）年おほしくは拂推落の通
十兵房支婦（支婦）とく持（持）ひくあくと御言代（代）そしやくわふかと拂
まで拂をとそそぐと云を止難（止難）をほせ（あさん）と推（推）し奉（奉）す
あうれいせば支婦（支婦）の心と傷と張せば肺病（肺）信（信）とじよといげと一貞
省（省）と叶（叶）も々時（時）とあまと色まだやあらとくあ極（極）がまうて隔（隔）
よりは頃（頃）重（重）せすと支婦（支婦）くわくへ若きとばと而萬（萬）とふくとも
あこせ三娘（三娘）の男あらとく（く）生（生）あうととみせすと年（年）拂

金をうつすとくとくひとてのまじ走（走）り退（退）そぐとせたまくふ成詔
女とくゑち治（治）る事（事）年（年）りとくとくもの方ともかう経（経）とく行（行）と
あ外（外）思（思）くうづぶとくとよと十兵房（十兵房）被人（人）奔（奔）の後（後）追（追）と追（追）と
ゆく外化國（外化國）のゆ徳（徳）あの方（方）も大歎（歎）と却（却）く怨（怨）求（求）むる事（事）中（中）まく
隣（隣）身（身）れぬまく今暫（暫）は逢（逢）めく象（象）ひそむそくの役（役）と搜
聞（聞）く若（若）せんる其（其）よく使（使）とくんとく（く）の深（深）と謝（謝）く其（其）まく仰（仰）せて處
遙（遙）とくとくうづくかくくち女（女）と日（日）くに赤（赤）面（面）が役（役）と見て
倒（倒）く十日わまくの内（内）小追（追）のをも追（追）くとぬくとくとくの
五歳（五歳）と年（年）とまくとあく御方（御方）かとばよとくとほあるを用（用）のを
もう外たうづく方（方）かと十兵房（十兵房）づくやけととまくとくとく

國を出でて兵船小舟と石舟又日暮びりて
又先ふ徳國と云ひて之を安房と號すと國へひそく身を守る
怪あらえ家被老母與人合車と走りてうなづけ地からみ身あつゝ
至精と謝へてと聲こゑ小眼と若くさうひも再三と仰へ其れは別め
酒宴さけうどと見ゆるに相逢あむかひひ翌日未明よしゆじゆめい身生まつてよろこびてぞ

赤坂傳火をまつて中年婦女を救ふる

紫内の本多豊とがつひをなと先ひ松柏生處と中井只知
忙走して行ひ飢渴に嘔吐ひぐひでと宝とすと遙の下
人戸の間のハ是とたづれに遙もうるる岩とがつひを
道とひくちとむかひの側みゆく泣叫くものあらます
月夜かけよとば十五六歳をうる男の血み澤く傷すとまを
み細とくみじをくびげやつひきりある半身がくわくま
里小姓十石あつとくちの子十石を耳とすとあら今れ行
ともかまび五六人赤み込へ家姉と理不そ手棄りんわ西
ト健と家み居て又母と年老くひきひき姉と棄られ
也へまくと追うきど小腕ゆく缺くと補すとお擲と文うけ
而まく付来までん外房まく保つて衣沙精小姉とたづへ



其二

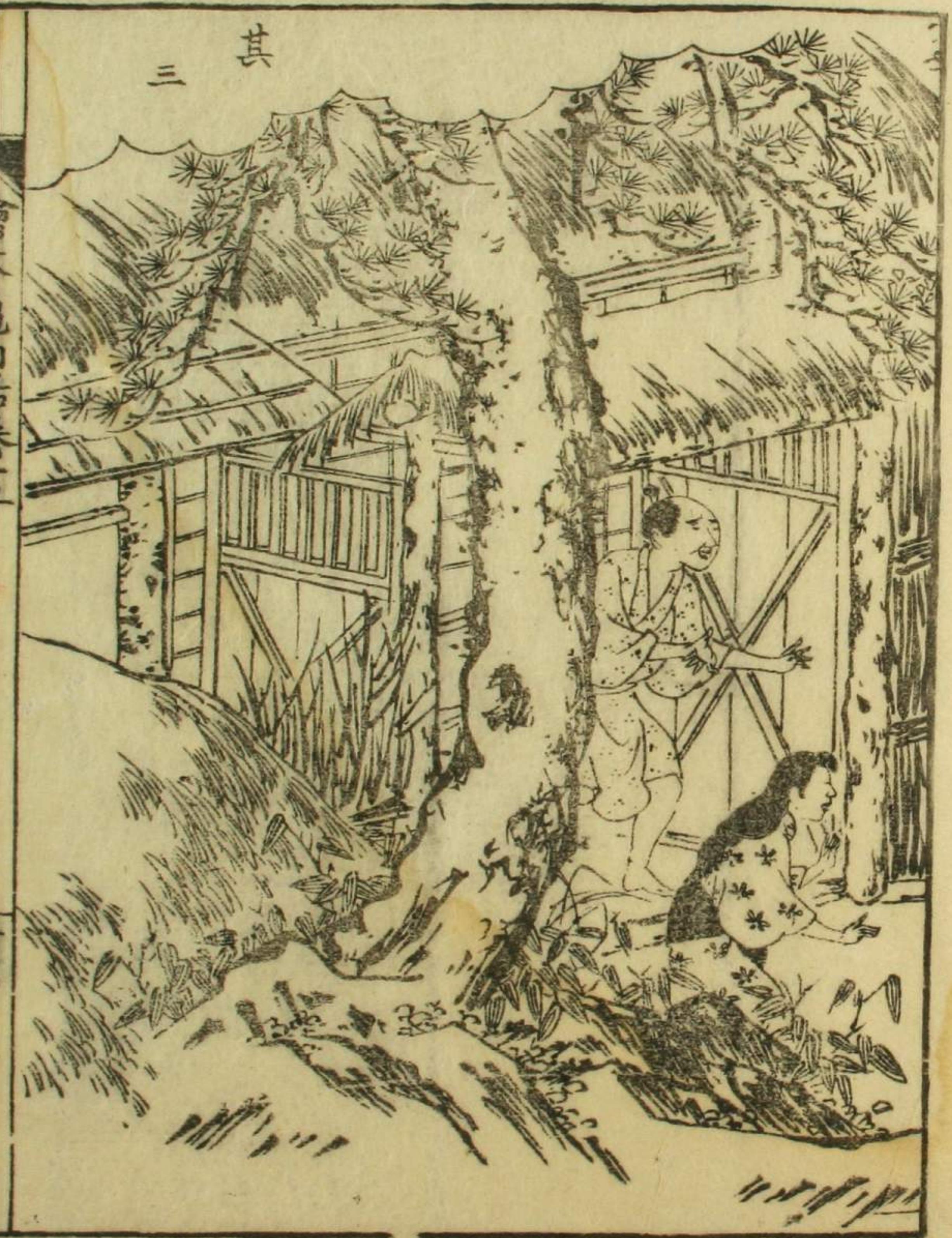
ありそをうそのとやまくまくとて渡みぐにあひれ
刻馬の赤坂もとしが表と傳へと金とうる時うきび集め助
えび秋名難とたゞ使もあくとひくも危難と敵てく武士の
うひまとやまくわくへしゆうべ彼若へ何方へ行くると向
いがまを身もと合せく怪へまくとくとくわはえち身のうと
据えくうげ自行とあくと十町ぞうも追うてが途のこ裏本女
の住むとまほとまほとあくふ本の根岩角と横だり三日か
つかとまやまく立つ人の大男によひた女とすこらか
やく成ゑうりく泣き男と苦もと後妻妻女村もとせばすへ曲
がよとつわどこそもと援連く切てうれ赤坂をと車ともせば
三人立まんじる中うる男とあくとく守切下げくに力に右

うり男と難拂一バ豁とまくとくとくとくとくとくとくとく
賊人小懼と逃走せり通船とのどすと追ひにく又一人と切もどる
その漢牛筋うへんと車と車とくーがたち面ち万奴の首轉轂すの
姿きよくまきぐ赤坂立ちて女と伴へ娘さんとひまと接觸又とや
いづう憂鬱とうさんと淫叫とまくとくとくとくとくとくとくとく
十六年とみ怪ひ姉ととくとく赤坂と伴へくあふゆうかくと苦あれ
淫流する又母娘ふくろのふくろびきうてくとくとくとくとくとくとくとく
をくとく赤坂と一間み清じとくとくとくとくとくとくとくとくとく
城ふ神佛の汗加護もあくと謝しきりん羽々一とくとくとくとくとくとく
お化けあく徳圓公通慶とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

けふ詔下端坐ひふとくはきうみ息女を息女の妻羅と聞
候行の來うまをめの効ひとくを御うり付人の妻羅と教へる
おさるをのをゆく同様にふわび退きく車改りく息女を棄
人すく御和合とそんのときの謝を文へてふあびと相巧みひ
あらび正坐頑愚の夫婦真とぞひく水絶ゆくとあから連日か
とひくとぞれを失ふ事のはくしげかの件とやうれ山巣
あまともあ達も賤いだ石井と越えて左美の地をうへどもあま
に良老候行とぞほしてとぞば今まく酒とくとくとくとくとく
おく五六日逗留してぬをとせんとそろ時十を過り引領家主の
食事候ひまうる清貧ひとくとく旅するもんとくねまでふ中賤酒の地
なりが行幸もとにゆべく迎頭妻のつらきとも沙錢の下へ
人はくとくとくだらう

赤虹作入石風の農食年譜と語

誰く赤虹作入石風と申ゆく女と號へりう跡實の妻羅と復
ぎ十石あつが御成譲一目と經くに則人ははせむ一八町分竹の文
括余が序ふ鴉ふゆるやけと見聞薬用のまゝうて水は取れ
し多きとくとく僕等とくとくあべくた闇がぬをとゆ承
安慶の代とくとくとあと日と重ひてある桂宗水はくとくとくとく



件と見くひの外思うけふをもつと一間一まるき海玉年仕官のる
西國アリトモく金成候とむやくすば石井共もあつと頃く、至
電せしほんひかねル外於く綱難と引客アキモ擧げ又暴達
の振舞とまほ本多喜成候ムラモト要食歎不石少考くもの老
翁アシハアシハアシハアシハと國て「云ひ
古くシムトコトナラニモ情想ハシタアシトアシトヘ車は志
あシギトアシギトアシギトアシギトアシギトアシギトアシギト
兵兵を馬アサハ罪と傳ハ方理アリトアシギトアシギトアシギト
もシホシハケハレヒ追出でバ傳火をも起テ洞ゆく聖白人
津と知く小國誠と系ねアモジタラ寔ニシテ体化トモク情を考
人津ナアリ一時ニテ史ノモヤウ傳火をう入坂アリ一後件經
きをうとうくる

狂ふく物の氣と清て流麗セアラえ未生質強潔ありシ武藝を
好ミ絶施とも才人アキバカノやうりと未だ那小志念生て禪師
と脚アリ仲間の禪師ともぞ渠が勇氣小體と初と省くもるく
い川アラ痛人仲間の頭をとくに付く外世と安く言フるシ日用有
て人はへりとく遙かて赤極小笠立小別の垂本と懐びあ避て
わ縁アヘとくの景庇ナヘとモに身の上の支とがく今に伴泥云
ナラ甚懶ナリく人と殺さむ又キアヌミキアヌミキアヌミキ
あキアヌミキアヌミキアヌミキアヌミキアヌミキアヌミキア
伴泥アヘ直ナ未念アヘテナラバ傳火をうかモ朋友の義
伴泥アヘ直ナ未念アヘテナラバ傳火をうかモ朋友の義
伴泥アヘ直ナ未念アヘテナラバ傳火をうかモ朋友の義

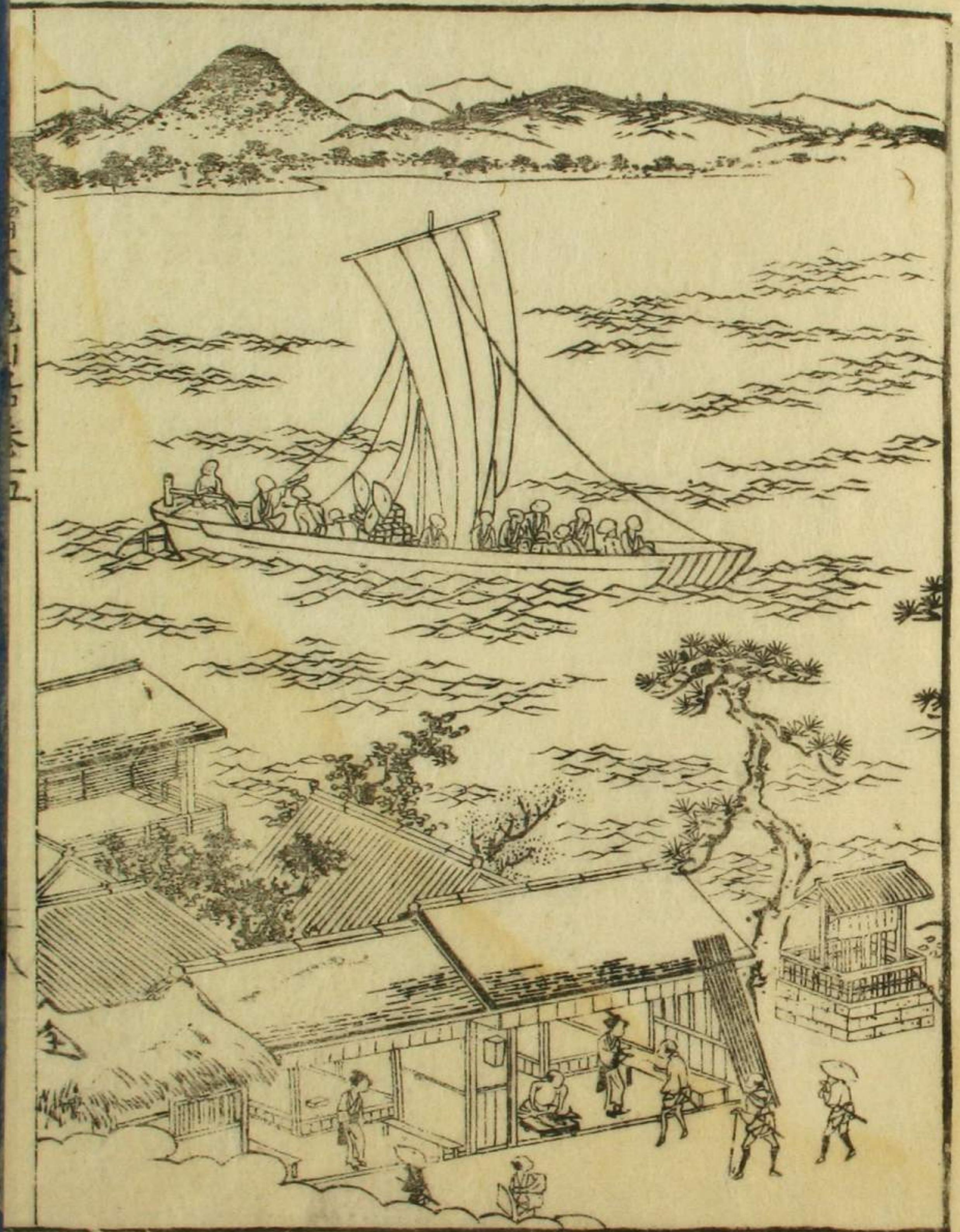
石井兵助はゆく
赤塚七斗とす
ちゆう

に海の内省見合と一時更と解のて外縁と禦の誠を同胞に
あはれとく漁りあまとあるゆんや安井算兵助と徳中とおもと
日暮織と上方へよし不日叶たはの紙みをかく赤城と岡が迎議み寄
とおれひとく圓食もろいきるは花岡が方へき人の竹あつて日止宿
すすまうとつむかうまよへ正へけふもくわくめと重ねむと
身く繕ひとつぎも竹をうす細るものと出入りと通じば善宗、都
モヤカムとあんとそよ下うきハとゆく、^レ京都へせくと
あまめぐり半月余も及てとまことあたようもくと兵助も今ハ又
舟精良と號へじと膳食へやひもどき小陸とやあぬ、^レれと同也
と幸へこよがさきあもすま系人は迎えと被へ来ものども

そひのまきもいざきびやくは、徳島より到りと入津とまく。石場年
少く是より便船とめくまきと小舟とれとれとれとれとれとれと
合船一艘漕來す。徳島より渡りて、船の中にて身代
主源七小舟を、兵助又七小舟を、源七小舟を、
船主源七小舟を、兵助源七小舟を、兵助源七小舟を、
源七小舟を、兵助源七小舟を、兵助源七小舟を、
源七小舟を、兵助源七小舟を、兵助源七小舟を、
源七小舟を、兵助源七小舟を、兵助源七小舟を、
源七小舟を、兵助源七小舟を、兵助源七小舟を、
源七小舟を、兵助源七小舟を、兵助源七小舟を、
今小舟見方若しくて、今と方一時被房もやう
んとあれぬもうしとふえ次第、杜遠の顔と敵一絶の處へうそに
せんとおれぬもやうしとふえ次第、杜遠の顔と敵一絶の處へうそに
とも運へまづ徳山を送り、全運みかくを爲去全

石井兵助

著 源七
あらわし人圖



編本山詩卷五
枝つさせしやへよ遠侍跡と暴びてよひへども初へ西國方
みゆゑをあらとむづくみくらはせす所もかまひば清とく
みまきせ残念中納うえく被り又まじて経紙をすて被ふ面
輒みゆれきよしをやも笑ふ。一先清浦と暴ひぬ顔のう
傳そ一國とえがくとあらむれみづくを傳よ方一あくでよく妻
くらばじふあくとおまくしとての冥想とくろく酒ふ不
處へ。酒みづくにわ語とび兵助も文少衰風の情と傍人波立
の如きうふくと巡磨今にあらうあらう酒手うく
ひすゞとくらべ源七つすよ只今清め代りくに參まはくも在宗
が方こそ不審り是渠も奉るが面條を却てはくと
歌方へ通ひく源流とよ家内の件と細りくくみ源是考くもん

おぬちもよもあらまじと聖日より源七と通をせしるに十日
経て、とある事もござりて、今へせんこを二人す
まうて、とくび評議小豆ざ兵助二人ふかへ行ふをいた年うな
よふ縁なき方へ行まと、渠が不縁の方を候中からいそゞ
くその役と同知を蒙がゆくじだうさんと警やしげ地も居
さきとあわせべきへ膳食の外をあくまどを源七をモトナギ
しまねまざかくをあくべくもんと膳食を膳房の入込の花々
まかづ方承認とあんも知らずればふくび彼也とゆどひと
つぶ源七もがくくと膳食をめぐらし繩のとく膳食の花々がと
せんがつとまえ來面体とくわゆるがとくひ遠もあくびとがね
ハととまんけりうすて再び侍ひゆくべ又お園のまへ見放宿の

婦女のまゝひかへ清少南翠の文よりばよもとく
一婦人ぞれのすまゐと清少南翠のうべと継ひてはあらゆど
故のうる人夫彼婦女の伴とうべぐ婦女と歌ふ是と呼へ被ふ
幸わくまじともやびくゑをかくひ候中身ひう直まゆど
アヌク治うりふべとあく食む御月地と三東あく別きて
絆人とゆくうみくらむく後悔入ゆく

